**2011 年 12 月 21 日放送**

# 印象に残る症例②

**福島県立医科大学　器官制御外科学　助教　　渡辺　久美子**
（現・独立行政法人国立病院機構仙台医療センター　乳腺外科）

女性外来には今日も悩める女性がやってきています。今回の患者さんもどこに行ってもなかなか症状が改善しなかった患者さんです。

症状はただ一つ。「自分は臭い」ということ。

症例は 74 歳女性、147cm、40kg、血圧 142/82

2010 年 11 月、初診時の問診票には 2010 年 6 月下旬頃から体が臭くなり 8 月下旬からは油がこげる様な匂いと、ヨモギ、ショウブのような匂いがあり、その匂いが強く家の中全部に付いてしまって困っています。この体臭、どこから匂ってくるのか知りたい。家族、周囲との人間関係は良好、趣味はウォーキング、専業主婦、息子と二人暮らし、などが記載されていました。

さて女性外来を受診するまでの経過をお話ししましょう。2010 年 2 月に尿道のできものの摘除術を受けました。翌月から尿道から粘液を自覚し、更に次の月には匂いも自覚しましたが、主治医からは年齢的なものもあるので気にすることはないと言われたそうです。

症状が改善しないため 7 月に当院泌尿器科を受診されました。診察上異常なく、泌尿器

科から婦人科へ帯下に伴う悪臭疑いで紹介となりました。婦人科では老人性膣炎との診断で膣錠挿入・内服薬処方になり終了となりました。しかし症状はとれず皮膚科を受診されました。皮膚科での訴えも、6 月頃から体全体が臭いと感じるようになり異臭がすると。泌尿器科では異常なし、婦人科では老人性膣炎と診断されたが匂いが消えない。お風呂にも入っているし服も洗っている。皮膚科医と看護師二人が体中の匂いを嗅いでみるも異臭なく、深く考え込まないようにと言われたそうです。カルテには心身症と記載されていました。匂いと言えば鼻、鼻の中から匂いがするような気もするということで、鼻に関係する耳鼻科を次に受診しましたが、器質的にも機能的にも異常は見つかりませんでした。洋服や布きんなどの自分が触った匂いか、食べ物の匂いかはちゃんと識別してわかります。いよいよ耳鼻科から精神科に紹介が必要かというときに、看護師さんに女性外来を受診したらどうかと勧められたそうです。そのようなやや長いいきさつがあってこの患者さんに巡り会いました。自分は臭いとずっと思い込んで生活しているのですから、とても辛かったと思います。

ここまでが問診票、他科受診の情報です。これからは実際にご本にからお話を聞いて得た情報になります。マスクをして診察室に入ってきた患者さんの姿は、顔に表情がなくうつむき加減で、歩き方も弱々しく何となく辛気臭い感じでした。話声もか細いのですが訴えは強かったのを覚えています。

気が付いたのは 6 月、最初は下半身、下腹部の方から匂っていましたが、だんだん全身に広がっていきました。今は鼻の奥の方からも匂ってくる感じがします。古い油を使ったような匂いです。泌尿器科、婦人科、皮膚科では異常はないと言われたんです。お風呂にも毎日入っているし着替えもしています。最近は家の中も匂っていて息子も臭いと言うんです。洗濯機にも匂いが付くので、自分のは手洗いして息子のは洗濯機で洗っています。でも一緒に干すと匂いが移ってしまうので別に干しています。ティッシュや布団などにも匂いがついてしまっています。今は家の中でマスクや手袋をしています。近所の人も気づいていると思うけど誰も口に出しては言ってこない。人に迷惑をかけるので外出もあまりできないんです。初診時はこのような話をお聞きした後、いろんな科をまわってきて大変だったと思いますが、これからは一緒に治していきましょう、とお伝えし、次回これが特に匂うという物を持参していただくことにしました。また息子さんの同席もお願いしました。

さて次の外来に持ってきたものはさらしでした。異臭はしませんでした。息子さんもそんなに匂わないとご本人の前で強調していました。ご本人が突然「この前は一緒に治していきましょうと言われて嬉しくなって泣きそうになりました。嬉しくて目の前がぱーっと晴れたようでした」と話し始めました。あまりにも嬉しそうだったので、何かストレスや心の悩みが原因して、異臭という形で現れているのではないかと思い、症状だけに捉われ

て急いで治療しようとはせず、もう少しゆっくり話を聞いてみようかと思いました。そうしたところ夫を亡くしてから落ち込んでいたこと、やっと復活したところで、ある問題で親戚と喧嘩になり、それ以来親戚付き合いを一切断っている、そういうことがあり 1〜2 年前から精神的に病んでいることなど堰を切ったように話し始めました。自分では気にしすぎることもあるが、この臭い匂いに関しては発するものがあると信じている、必ず治したいと思っていると。

ここで考えたのが、キーワードとして匂い。何となく辛気臭い、うつうつでした。まっさきに頭に浮かんだのがまたもや香蘇散です。匂いには香で勝負してもいいかも、と。

ご本人には、香蘇散のなかに紫蘇葉が入っており、お湯に溶かすとややピンクになり香もあって、きっと鼻の奥の方の変な匂いが良くなるかもしれないと説明。匂いを発するものは私にもすぐにはわからないけど、辛い気持ちが少しでも楽になるような薬を選んでみたから飲んでみてね。時間がかかるかもしれませんが、きっと良くなりますよ、と。

3 包 3 x で処方して一ヶ月後の 12 月。マスクをつけて診察室に入ってきました。歩き方もあまり変わりませんでした。ところが開口一番「あまり気にならなくなりました」という言葉が。処方した私もびっくり。かなり改善していました。

このまま香蘇散を継続し、1 月に受診していただいたところ、マスクはつけずに笑顔で診察室に入っていらして、風邪も引かずに過ごせた。今は寒いから匂いも気にならないが、暑くなってくるとまた匂うかもしれないと思うと心配で食欲がなくなることもある。しかし今は気にならないので飲み忘れることもある。そのような訴えから、夏過ぎまではしっかりこちらで診察して行くことをお約束し、香蘇散は 2 包 2 x に減量して処方することにしました。

2 月には、飲み忘れるが飲んでいると安心ということで 1 包 1 x に更に減量しました。3 月の震災直前に受診され、薬はしばらく飲まなくても良さそうだということで処方しませんでした。異臭のことは、聞かなければ話題にものぼらないような状態まで改善しました。その後震災に遭い自宅が半壊状態になるというような大変な事態になりましたが、前みたいに落ち込んでいてはだめだ、何とかしなくちゃという気持ちが出てきて、どうにか乗り越えられたとのことでした。

いよいよ暑い夏がやってきましたが、本人はけろっとしていて、外来に来るのが楽しみだった。話を聞いてもらえると安心する、薬はずっと飲んでいない。去年はあんなにひどかったのに、あれは何だったんでしょうねと。私も、何だったんでしょうねぇとお答えしましたが、実は辛気（心気）が臭かったのでしょうか。

辛気（心気）とは心持ち、心、気持ち、気分、心が晴れ晴れしないこと、くさくさすること、またその様ということです。

まとめに入ります。

今回の症例でも香蘇散を用いました。

香蘇散の構成生薬としては香附子、蘇葉、陳皮、甘草、生姜が含まれています。中でも、香附子、蘇葉、陳皮は気に働きかける生薬です。

加藤清正が朝鮮出兵の際に、外地での不安と度重なる苦戦に精神不安になった兵士達を香蘇散で落ち着かせて苦戦を乗り切ったというお話もあります。

患者さんの主訴は「自分は臭い」ということでしたが、漢方医学的には、うつうつというキーワード、まさに気鬱の兆候も見られました。香蘇散によって鬱滞していた気のめぐりを改善し、患者さんが気にしていた異臭は全く気にならなくなった、印象に残る症例です。